

2006 聾学生のためのリーダーシップ養成英国研修

筑波技術大学、障害者高等教育研究支援センター

須藤正彦 長南浩人 白澤麻弓

要旨：2006年8月「聾学生のためのリーダーシップ研修（於英国、東サセックス州）」に参加するために、本学学生4名を教員3名（コーディネーターと通訳）で英国に引率した。当リーダーシップ研修は、PEN-International（聴覚障害者のための国際大学連合）が主催する一週間のプログラムで、アメリカ、日本、中国、ロシア、フィリピンの高等教育機関で学ぶ聴覚障害を併せる学生20名が参加した。聾のリーダーとして活躍する先達の経験や講話を通じて、研修ではリーダーシップとは何か、リーダーシップを育てるにはどのような資質や経験が必要か等、研修の中で考え、学んだ事柄を発表することが求められた。また各国はそれぞれ一名の聾のリーダーの紹介と各国の代表的な文化を紹介し、有意義な交流の機会となった。本稿では当該研修の概要と募集から参加までの経緯、参加学生の参加後の感想を紹介する。

キーワード：聴覚障害学生、高等教育、リーダーシップ、PEN-International

1. はじめに

これまで本学は姉妹校であるNTID、天津理工大学等と協定に基づいた研究協力ならびに学生・教職員の相互訪問など活発な交流を行ってきた。また姉妹校提携はされていないが、フィリピンのデラサレ大学のセントベニルデカレッジとの交流も始まっている。これらの高等教育機関との交流はPEN-Internationalによるところが大きい。PEN-International=聴覚障害者のための国際大学連合とは、日本財団の支援を受けて、2001年に締結された高等教育機関ネットワークである。PENはアメリカ合衆国、ニューヨーク州、ロチェスター市にあるロチェスター工科大学の1学部であるNTID(アメリカ聾工科大学)に本部を置く組織で、大学で学ぶ世界の聴覚障害学生が、技術分野において質の高い教育機関で学ぶことができるよう指導方法や専門技術の共有を目指している。

2. 公募期間と選抜

学生の公募期間は研修の約10ヶ月前に当たる昨年10月末の1ヶ月間とした。最終的に8名の応募者があり、4名に絞るために事前に提出された小論文と面接結果にもとづいて選抜を行った。

3. 参加国と大学、参加者

アメリカ：ロチェスター工科大学のNTID（アメリカ聾工科大学）学部学生4名。

ロシア：モスクワバウマン工科大学、学生4名。

中国：天津理大学、4名。

フィリピン：セントベニルデカレッジ4名。

日本：筑波技術大学 デザイン学科2年森千明、電子工学専攻2年秋川元良、情報工学専攻2年田村結香、同専攻3年高橋健介（リーダー）4名。

各国とも1名の教官ならびに2名の手話通訳者が参加した。準備期間中は隔週でアメリカ手話=ASLの習得と随時PEN本部から送信されてくる研修期間中の課題や諸注意事項を分担して英訳し、英語の学習も同時に行った。



写真1 研修会場のハーストマンズー城

4. 講師

アラン ハーウィッツ博士、ロチェスター工科大学副学長、NTID 学部長 Dr. Alan Hurwitz, Vice President, RIT and Dean, NTID,

ヴィッキー ハーウィッツ氏、ロチェスター聾学校 Mrs. Vicki T. Hurwitz, Director, Rochester School for the Deaf Outreach Center,

パット デカロ氏、コンサルタント

Ms. Pat Mudgett-DeCaro, Consultant, Rochester, NY

ジョンマッコ氏 ロチェスター工科大学就職センター副部長、Mr. John Macko, Associate Director, Center on Employment, NTID/RIT,

ビルクライマー氏、ロチェスター工科大学教授、コーディネーター Mr. William Clymer, Professor, RIT and Coordinator of PEN International,

マーク ロシカ氏、NTID カウンセリング教官

Mr. Mark Rosica, Counseling Faculty, NTID,

ジェームズ デカロ博士、ロチェスター工科大学教授、ペンインターナショナルディレクター

Dr. James DeCaro, Professor, RIT and Director of PEN International,

デニス ケヴィン博士 ペンインターナショナル上級プロジェクト職 Dr. Denise Kevin, Senior Project Associate of PEN-International,

5. 研修所とスケジュール

期間は8月5日から12日までの一週間。英国、東サセックス州のハーストマンズー城、ヒースロー空港から2時間強の位置であった。

初日 (8/6)

午前：研修所内の案内、午後：自己紹介ゲームと各国の聾のリーダーについての発表

2日目 (8/7)

午前：「聾者のリーダーを育てる」ハーウィッツ夫妻

午後：「効果的なコミュニケーション能力と技術の向上」

ジェームズ デカロ博士、ロシカ氏

「リーダーシップと多様性」

パット デカロ氏、ロシカ氏

3日目 (8/8)

午前：「聴者が抱く聴覚障害者へのイメージと実際」

パット デカロ氏

午後：「効果目標設定と達成に向けて」

マッコ氏、ロシカ氏

「聾文化」 英国 Hay 氏

4日目 (8/9) ブライトン、ホワイトクリフ見学

5日目 (8/10)

午前：「成功した聾指導者の特色」ハーウィッツ博士

午後：「聾文化を発展させた指導者の歴史」

ジェームズ デカロ博士、ハーウィッツ博士

夜 文化交流、各国の文化の紹介

6日目 (8/11)

午前：「人間関係づくりから就職まで」マッコ氏

午後：「情報保障を得るまでの自助努力」

ケヴィン博士、ハーウィッツ博士

夜 「リーダーシップ」について発表会

閉会式

スケジュール詳細

http://www.pen.ntid.rit.edu/pdf/summer-institute/schedule_japanese/Schedule_Japanese.htm



写真2 研修企画担当 Dr.Kevin



写真3 デカロ氏とロシカ氏の講義

6. 学生プレゼンテーション

初日の夜に約30分の割り当て時間内で各国の「聾のリーダー」を紹介した。各国のグループごとに聾のリーダーを選び、そのリーダーについて紹介した。

- ・アメリカ：聴覚障害者のためのサービスを提供する団体CSDの創設者、Ben Soukupの紹介と Gallaudet 大学初のろう者学長、I. King Jordan の紹介
- ・ロシア：学生グループのリーダー Alexander の紹介、研修生4人、PENのリーダーの紹介

- ・フィリピン：フィリピン聾啞協会会長、Raphael Domingoの紹介。
- ・日本：さまざまな分野で活躍した聾者、高村真理子先生の紹介。
- ・中国 発表なし (記録 森千明)

各国の発表の詳細は以下に掲載されている。

ロシア

http://www.pen.ntid.rit.edu/pdf/summer-institute/presentation/BMSTU_Leader1.pdf

アメリカ

http://www.pen.ntid.rit.edu/pdf/summer-institute/presentation/NTID_Leader1.pdf

日本

<http://www.pen.ntid.rit.edu/pdf/summer-institute/presentation/NTUTleader1.pdf>

フィリピン

http://www.pen.ntid.rit.edu/pdf/summer-institute/presentation/CSB_Leader1.pdf



写真4 日本の発表



写真5 ロシアの発表

7. 文化交流

日本は折り紙の歴史とデモンストレーション (写真6)、中国は書のデモンストレーション (写真7)、フィリピンはダンス (写真8)、米国、ロシアは映像で国の紹介をした。



写真6 折り紙のデモンストレーション



写真7 中国 (右) 書をフィリピン (左) に



写真8 全員でのダンス

8. 参加学生の感想、日誌

(高橋健介)

私がこの研修を応募した一番の動機は、海外の聾の友達と交流をしてみたいと思ったからです。また今まで生徒会、

学生会などを活動してきましたが、今まで、満足するような活動は出来なかったのです。このリーダーシップ研修を通して、自分もみんなも満足行くリーダーシップをもってやっていきたいと思いました。私を含め、4人が日本代表に決まり、聾リーダーを紹介する事から私たちの勉強が始まりました。日本が紹介する聾リーダーは、私たちにとって身近で、海外との交流を提供してくれた、またASLを教えてくれた高村真理子先生を選びました。そこで一番苦労したのは、一人一人の発表内容を英語に翻訳する事でした。英語が苦手な私は、電子辞書を駆使し、須藤先生に訂正してもらいながら作り上げました。やはり、中学生の時からしっかり勉強するべきだと感じました。イギリスで他の国々の人たちと合流します。しかし、他の人とのコミュニケーションをとることに自信がなく、なかなか声をかけられませんでした。話せるようになったのは、自己紹介ゲームをやったときでした。もし、自己紹介ゲームがなかったらコミュニケーションが取れない状態のまま終わってしまったと思います。講義の内容はすべて新鮮で魅力がありました。私が一番印象に残ったのは、「聴覚障害者のリーダーを育てるには」という講義です。活動していた団体が多く、中には国際的組織活動もやっていたようです。この二人の言葉で心に残ったのは「失敗から学ぶ」でした。日本にいる聾者達も、尊敬する聾者を見つける事が聾の社会を支える事につながると思います。他にも、覚えきれないほどたくさんの知識を得られました。聾のリーダーシップをとること、健聴者との対応方法、目標の設定方法、コミュニケーションなどと、1週間で多くのことを学びました。いろいろな国の情報、聾に関する情報が濃縮されていたのは、PEN インターナショナルだから出来たことだと私は思います。私たちが得た知識を、日本にいる聾学生達に提供しなければ、もったいないと感じました。また、アメリカ、ロシア、フィリピン、中国の聾学生との交流も貴重な体験でした。イギリスへ行く前は、日本語、英語、ロシア語、中国語と4カ国語を話し合うというイメージがありました。しかし、実際には身振り手振りで通じます。ASLが通じなければ、ジェスチャーをつかってコミュニケーションをとりました。「友達と情報交換したり、相談したりすることで、さまざまな問題を解決する事ができる」と講義でも学びました。私は日本の友達だけでなく、この機会でも得た友達とも付き合っていきたいと思っています。貴重な機会でも学んだことを生かし、少しずつ活動を進めて行きたいと考えています。

(田村結香)

8月6日

期待を胸いっぱい膨らませて挑んだ研修1日目。実際にHerstmonceux城を間近で見えて感動した。見学ではエリザベス女王が昇った階段や首なしドラマーなど城にまつわる話をたくさん聞くことができた。紹介ゲームでは各国の研修生と少しだが打ち解けることができた。コミュニケーション法に不安を感じていたが、無用だった。言語が違ってコミュニケーションをとることができる聾文化のすばらしさを改めて実感した。グループ発表では各国がテーマにこだわらずに自由に発表していたので日本との違いを感じた。これからの1週間が楽しみである。

8月7日

本格的に講演が始まった。Hurwitz夫婦の話は非常に興味深い内容だった。「やってみる、経験してみることが大切」というごく当たり前の言葉が非常に心に響いた。二人の経験を聞いて、自分の将来について深く考えさせられた。自分は今何をするべきなのか、これからゆっくり考えていきたい。「効果的なコミュニケーションと交渉技術の向上」では状況に応じて5つの対応法を使い分けられるということがよくわかった。頭を柔らかくし、問題に対して臨機応変に対応する力をつけるということがどれだけ難しいか考えさせられた。

8月8日

講演「イメージと実態」では、聴覚障害者の仕事について考えさせられた。日本は社会全体が「聴覚障害者には出来ない」という先入観や思い込みが強い風潮にある。ただし、コミュニケーションや安全性に対する改良策を考え出すことによってこの先入観をなくすことが出来るということ学んだ。アメリカやロシアの考え方は日本人と正反対であり、「無理だ」という考え方があまりないので、見習いたいと思った。「目標設定と達成に向けて」が一番印象に残った講演だった。最も印象に残った言葉—“A goal is a dream with a deadline.”これを座右の銘にしたいと思った。「目標」「達成方法」「期限」「資源」を表にして書きとめて目標設定→達成→自信をもつ→新目標設定...というサイクルを繰り返すことによってリーダーシップを育てることが出来る。この目標設定法は非常に有効な方法だと思う。そして、この講演で自分が明確な目標を持っていないことに気づいた。他の研修生はほとんどが明確な目標をもち、堂々と発表していたので刺激を受けた。

8月9日 見学旅行

有名なドーバー海峡、ホワイトクリフを見ることが出来、いい経験になった。英国の自然には心落ち着くものがあり、

また来たいと強く思った。趣ある町並みも魅力的だった。夜はパブで森さんの誕生パーティを行った。突然決まったパーティにもかかわらず全ての国がお土産をプレゼントにして渡していたので驚いた。さすが日本人とは違って、人を喜ばせることを常に考えているのだと思った。

8月10日

休憩時間に行ったTV会議は初めての経験で新鮮だった。このような設備の発達は聴覚障害者の情報保障にも大いに役立つと思う。情報工学を専攻する身として、このような設備についてももっと勉強したいと思った。講演「成功した聾指導者の特色」では Alan 氏が経験を元にして学んだ「リーダーシップ」について話してくれた。議論の方法、組織の作り方、リーダーに求められる力についてなど、非常に勉強になった。救命ボートゲームでは言いたいことが言えず自分の表現力の乏しさがっかりした。他国は言語が違ってても豊かな表現力でコミュニケーションをとっていたのすごいと思った。これが聾文化なのか。やはりコミュニケーションとるには「伝えたい」という気持ちを強く持つことが大切なのだろうと思った。私は伝えたくてもうまく表現できないと途中で諦めてしまう癖があることに気づいた。これは日本にいるときでも同じである。手話がなかなか上達しない原因はここにあったのだと思う。コミュニケーションを取ることの難しさについて改めて考えさせられた。夜は文化発表があった。

8月11日

研修最終日。人生で最も大切な技能のひとつである人間関係作りについて、情報保障を得るための自助努力についてなど、最終日にふさわしい講演内容であった。本当にあっという間の1週間だった。この研修で出会った人たちとはこれからも連絡を取り合っていきたい。THANK YOU!!
ここで学んだことをこれからの人生に活かしていきたいと



写真9 パブにてトランプ交流

思います。内容の濃い充実したプログラムを用意してくださったスタッフの方々には感謝の気持ちでいっぱいです。本当に有難うございました

(秋川元良)

(8/5)

12Hと1.5Hの飛行を終えて空港に到着したのは夜の9時近くになっていた。けれども空は真っ暗ではなかったのは緯度の高い位置に来たという感動があった。ロンドンタクシーと呼ばれる車からイギリスの雰囲気あたりが漂っていた。最初のコンビニでの買い物は、小銭と札の感覚が日本のままで、混乱してしまった。

(8/6)

朝は7時30分に起床。太陽光は日本の10時頃の明るさだった。気温は寒くも暑くもなかった。自分たちの泊まった施設の周りには古い建物ばかりだった。そこに長い歴史を感じた。イギリスに来る前に、友達にイギリスの伝説の物語や、幽霊話を聞かせてもらったので、夜のお城は気味悪くも感じた。ギーッと鳴る扉が恐ろしかった。

(8/7)

施設の案内では「首なし太鼓」といった4人の幽霊話に興味を持った。牢屋や壁に遺体が埋められているということも説明を受けた。建物の構造からインテリアなどはどれも立派なものだった。日本でいうセレブの生活を体験した感覚を覚えた。コミュニケーションに関しては他国人の指文字のスペルやASLなども多少覚えることができて、スムーズな会話をすることができた。今夜はパブに連れて行ってもらった。

(8/8)

今日は一日中レクチャーで座りっぱなしだった。食べては座って、座っては食べている感じだった。つつい食べてしまう。ご飯だけは日本人として味がまいちだったが、スベアリブなどの肉を贅沢に使った料理は私自身を満足させてくれた。レクチャーでは、休憩時間が20分程度で続けたので、ハードな感じもあった。グループで相談して発表する機会が多かったのは大変だった。

「効果的コミュニケーションと交渉技術の向上」をテーマとしたレクチャーでは自身を持って、「ふくろう」タイプに手を挙げたのだが、日本以外だれも手を挙げていない事は非常に驚いた反面、国際的な文化の違いを学んだ。

(8/9)

今日の夜は Bill さんが全員にパブで飲み物をおごってくれた。運よく頼んだお酒は甘くておいしかった。パブが終わったあと、コンピュータールームで日本からのメール

チェックとデジカメデータが一杯になったので、フラッシュメモリ移した。パソコンが文字化けして操作があやふやしたのは運がついてない。

(8/10) _____

今日一番のサプライズはイギリスの健聴者がジェスチャーを理解していたことだ。朝から私達は数日間滞在していたお城からついに街へ出てきたのだ。イギリス人は日本人と比べると比較的人柄がいいように思えた。

日本では話しかけられても無視するということが少ないのだが、非常に親切に道を教えてくれた。ビーチでは沢山の人がいて、ゆっくりとした時間を過ごしているのを見て、のびのびしている姿が輝かしかった。日本では時間に束縛されている部分があって気をぬけないところがある。日本を客観的なアングルから見ることができた。

(8/12) _____

レクチャー内容では、「Culture Night」が非常によかった。他国の文化や生活スタイルに関する説明は興味津々だった。日本の発表が他国の人に喜んでもらえたら嬉しいと思う。今朝、Dr. DeCaro からテロのニュースがあった。イギリスとアメリカ間の飛行機を爆破させるといったものだった。飛行機のダイヤルが乱れたようで、自分たちの飛行機に影響があるかもしれないとのことだった。のちに、手荷物がビニール袋で帰る姿になるとは予想もしてなかった。

(8/13) _____

お別れの日がやってきた。朝が4時と早く起きてるのが辛かったがしかたない。持ち物にビックリしたのは、フィリピンや中国、米国、英国ではデジカメやパソコンが日本製の人が数人いたことだ。普段他国のものを使っている自分が、自国のものを使っている人を見た事がなかったからだ。飛行機の中では日本や自分の将来性について話をしたりしたが、やはり日本ではノーマライゼーションが難しい状況にあるということを実感し、手話が言語として認められる事で、ジェスチャーが国民に浸透していくといいと願っている。帰国したあとも聾に関して努力をしていきたいと思う。

9. おわりに

今般8月5日～12日まで「聾学生のためのリーダーシップ研修（於英国、東サセックス州）」に参加した。筆者はコーディネーターとしてPEN本部からの膨大な英語資料の訳と参加学生への伝達・指導を担当した。当研修が第一回でもあったため引率側も要領をえず、参加学生にも負担をかけることになったが、約10ヶ月を準備に費やした価値のある内容の濃い研修であった。PEN-International（聴覚障害者のための国際大学連合）が主催したこれまでプログラムにない、学生中心のまさに聾者のリーダーシップを育てるのにふさわしい研修であったと感じる。研修では個人で考え、グループにフィードバックし、学んだ事柄を互いに発表しあいながら、他者の意見にも傾聴することを学生は学んだ。講義のみならず、各国の一名の聾のリーダーの紹介と各国の代表的な文化を紹介し、有意義な交流の機会となった。本学をはじめ難聴学生が在籍する我が国の他の教育機関は、学生・生徒本人への支援はもちろんのこと、他の教育機関や保護者への情報提供機関であることが期待される。様々な生き方に対応できる広範な支援内容を目指すことが肝要と考える。細やかなサポートも重要であるが、同時に学生が情報保障等の支援に対して各サービスの利用、要望について本人が主体的に提案していけるようアドボカシーを育てていくことが重要である。この点でも今回の研修プログラムは当をえた内容であった。研修滞在中、参加学生への指導・支援でも大いに協力下さった通訳の皆さんにも深謝したい。本英国研修はPEN International および日本財団支援を受けて行われた。

参考文献

- [1] 須藤正彦：米国研修旅行の成果と今後の課題，筑波技術短期大学テクノレポート，7，157-161，2000
- [2] 松藤みどり，萩田秋雄，長谷川洋，大塚和彦：フィリピン聾教育事情，筑波技術大学テクノレポート，12，71-77，2006
- [3] 高橋理恵子：PEN インターナショナルによるリーダーシップ研修，みみ，113，70-71，2006

2006 Summer Leadership Institute for the students with hearing impairment in England

SUTO Masahiko CHONAN Hirohito and SHIRASAWA Mayumi

Research Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired

Abstract: Postsecondary Education Network (PEN) International for the deaf and hard of hearing was established to function as an organization providing better education and opportunities on employment through international collaboration. So far partner institutes of PEN International have carried out so many programs. Leadership Institute for the students with hearing impairment had been planned and carried out at Herstmonceux Castle, East Sussex, in England this summer. Twenty students, sixteen sign language interpreters and voice language translators, four faculty members, and speakers from the National Technical Institute for the Deaf and each of PEN-International's major partner programs in Japan, China, Russia and the Philippines participated in the program. There were also guest speakers of England. The goals of the Institute were to promote development of leadership skills among postsecondary student leaders; to focus on self-advocacy skills in the areas of support services in postsecondary education, community access and employment; and to engage in learning about Deaf Culture and awareness.

Keyword: Students with hearing impairment, Higher education, Deaf leadership, PEN International

